書評

岡山裕『アメリカ二大政党制の確立―再建期における戦後体制の形成と共和党』

（東京大学出版会、2005 年）

貴　堂　嘉　之

本書は、岡山裕氏が 2004 年に提出した博士学位論文をもとにし、アメリカの二大政党制の確立と戦後体制の形成という二つのオリジナルな視点から再建期の政治史を考察した、これまでの 10 年あまりの研究の総まとめとなる力作の論考である。本書のテーマとなる共和党と民主党の二大政党制は、政治学、あるいは比較政治史の分野でも、それが現在の政党政治の有力なモデルとして、理念的な影響力を持ち続けていることから関心も高く、今日的意義を有する研究テーマとして注目を集めている。また、日本の政治状況をみても、小選挙区制の導入と前後して、わが国でも自民党の一党支配が崩れ二大政党制が現実の可能性として議論されるようになったことから、この制度の将来性や抱える課題・限界に関心が集まっている。本書の第一章第一節で詳解される二大政党制をめぐる理論的分析枠、とりわけ「デュヴェルジュの法則」を理論的基礎とする系譜の研究史と本書のその乗り越え方についての展望は、こうした関心を持つ読者に十分な応答となっている。

ただ、たしかにこうした政党政治への関心にも応えるべく目配りがされているのだが、評者からすれば、本書は間違いなくアメリカ合衆国の 19 世紀後半という時代に沈潜した歴史研究の書であり、それ以外ではない。政党再編成論のなかで、再編期・安定期の交互のサイクルとして捉えられてきたアメリカ政党制の歴史は、5 つに分けられ時代区分されてきた。革命直後のフェデラリスツ対リパブリカンズの原初的政党制を第一とし、1830 年代に始まる民主党対ホイッグ党を第二次政党制、1850 年代以降の民主党対共和党の第三次政党制、1890 年代半ばには産業資本主義をめぐる対立から共和党優位の第四次政党制、そして 1930 年代には大恐慌を契機に民主党優位の第五次政党制が登場したとされる。本書が扱うのは、この第三次政党制の「時代」であり、連邦と州、北部と南部、共和党と民主党との間で織り成される「政治」であり、理論ではない。本書の視角は、二大政党の均衡に焦点があるのではなく、共和党と民主党という特定の二政党による持続的支配がなぜこの南北戦争以後の半世紀に確立していったのかという問いにある。それは、当然のこととして、この党派的時代の複雑な政治状況の分析なくしては解明できない。また再建法の成立を画期とし、1877 年までの再建政治の終焉を区分とする従来の枠組みではなく、その後に続く一定の期間を戦後体制の形成という視点から展望しようとする本書は、新たな金ぴか時代・再建期像を提示しており、興味をそそられる。

以下、評者としては、本書の内容を解説し、また同時代を社会史的視点から研究対象とする立場から、その研究の意義と問題点、課題について若干の考察を加えることでその責を果たすこととさせていただきたい。政治学的視座からの本書の評価は、私の力量を超える部分でもあり、その点はここでは言及しないこととする。本書の構成は、以下の通りである。

主要目次

序　問題の所在
一　ブライスの問いかけ　二　戦後体制の形成　三　本書の今日的意義
第一章　本書のアプローチ
　第一節　先行研究とその限界　第二節　本書の分析枠組
　第三節　再建期の共和党と二大政党制
第二章　南部再建という危機
　第一節　黒人選挙権と戦後の政党制　第二節　「大統領による再建」と政党制の流動化
　第三節　「連邦議会による再建」の開始と危機の顕在化
第三章　南部再建の解消
　第一節　危機の深刻化　第二節　共和党の「強行突破」と危機の解消
　第三節　南部再建と二大政党制
第四章　再建から改革へ
　第一節　改革の政治とその担い手　第二節　第一次グラント政権と二大政党の変容
　第三節　再建期の分水嶺としての一八七二年選挙
第五章　戦後体制の政治過程
　第一節　禁酒運動――共和党との愛憎関係　第二節　労働・農民運動――「生産者」達の挑戦
　第三節　グリーンバック運動――連邦レベル争点への進出
終章　再建期を越えて

はじめに、簡単にまず本書全体をまとめておきたい。この南北戦争・再建期は、1960年代まで、いわゆるダニング学派の解釈のなかで、カーペットバガーと解放民（元黒人奴隷）に牛耳られた「悪政」の時代とみなされてきた。その後、再建期の革新性を強調する修正主義が起こり、1970年代には逆にその保守性を浮き彫りにする研究が量産されるなど、きわめて論争的な分野であり続けた。だが、エリック・フォーナーの『再建』（1988）が提示した、保守性を持ちつつも革新的な変革期として同時期を「未完の革命」として捉える見方がその後の研究の流れを決定付けることとなり、これを乗り越えるために今日ではミクロな事例研究が積み上げられている。[1] 日本でも、長田豊臣（1992）や辻内鏡人（1997）の研究があり、決して多くはないがこの潮流は日本のアメリカ史学にも継承されている。[2] 本書が扱う政党史、とりわけ共和党研究でも、この前者の革新主義学派のステレオタイプ的解釈をいかに乗り越えるのかが一つの動機付けとなっている。「組織の政治」を追及し、内戦遂行の過程で工業、金融資本との癒着を強め、その後も保護関税などを通じ経済発展を支え、「産業資本主義の党」としてのアイデンティティを確立していったとの解釈を乗り越えるために、まず本書は北部の政治、「改革の政治」に注目し、19世紀型

---

[1] Eric Foner, *Reconstruction: America's Unfinished Revolution: 1863–1877* (New York: Harper & Row, 1988); 落合明子「最近の再建期研究――フォーナーの『再建』以降の動向を中心に」『アメリカ史研究』第25号，2002年，15–23.

[2] 長田豊臣『南北戦争と国家』（東京大学出版会、1992年）；辻内鏡人『アメリカの奴隷制と自由主義』（東京大学出版会、1997年）。

政党政治というこの時代特有の政治のあり方を抽出する。つまり、共和・民主両党による二大政党制が存続する上で、各州で展開される政党政治がかなりの自律性を持ち、連邦レベルの政治争点が州レベルのそれよりも強調されていたという、当時の政党政治の構造的特徴こそが、決定的に重要な役割を果たしていたというのである。

第二章からは各論で、特に最初の二つの章では、南部再建のなかでも黒人への選挙権付与問題に注目し、それが政党制に与えた影響を検証している。この点は、再建期研究では黒人の市民的権利の拡大という文脈のなかでその可能性と挫折のプロセスがしばしば取り上げられてきた。二章では、この争点が「連邦レベルの非対称の争点」となり、共和党を不利な立場に追いやっていく状況を描く。具体的には、ジョンソン大統領による偏向した対南部政策への反発から、共和党員が団結して議会主導の再建へ動き出す過程を扱う。

第三章では、黒人選挙権問題を通じて、共和党の危機が深刻化し、1866 年以降、それがどのような形で現れ解消に向かったのか、北部との関係で急進的な諸政策がいかなるディレンマ、危機をもたらしたのかが取り上げられる。というのも、黒人選挙権に関して、再建法により南北の立場が逆転してしまったからである。非差別的選挙権ですら、大半の北部諸州、境界州では実現していない状況下で、逆に占領下の南部では実現していく「ねじれ状態」が生じるのである。そうした状況下での 1867 年の「反動」の分析、大統領の弾

（挿絵 1 ：左）“Sickly Democrat”「全部、飲み込まないとダメですか、チェイスさま？」（*Harper's Weekly*, July 11, 1868）
共和党急進派のチェイスが民主党候補となったときの、黒人への投票権付与をめぐる確執を描いたトマス・ナストの諷刺画。
病人の民主党に、グラスに入った薬を投与しようとするチェイス。だが、グラスには小さな黒人の姿が見える。
（挿絵 2 ：右）“Children Cry for It”（*Harper's Weekly*, February 3, 1872）
リベラル・リパブリカンが組織され第三党運動があった 1872 年大統領選挙。グラントの再指名をめぐり、新党結成を主張した多様な政治家（ブレイン、コンクリング、グリーリー、シュルツ、サムナーら）の顔がみえる。

劾裁判、そして、憲法修正15条の発議へと向かう政治力学の分析は大変興味深かった。

すなわち、従来15条修正条項は、その制定を再建政治の流れからして当然のものと捉えられがちだが、岡山氏はこの「強行突破」を、共和党が南部再建という危機を克服し、それによって二大政党制が一時的にせよ安定化するに際して決定的な役割を果たしたとし、「放逐説」を唱える。15条修正が、黒人選挙権の争点の政治的意味を失わせて、それを非政治化、あるいは「放逐」するために制定されたとする見方をとる。ただ、この黒人選挙権という争点の消滅により、共和党は再建をめぐるディレンマを解消するが、それは皮肉にも南北戦争が直接に関わる争点が平時における政治的な妥当性を失うことを意味した。

第四章と第五章では、再建から改革へと政治の焦点が移行して以降が扱われる。第四章では、これまで注目を集めることもなかった「改革の政治」であるが、実は南北戦争と再建の政治が、改革派にとって新たな改革実現のモデルを提供したこともあり、これを党是とするのが不可欠と考えられるようになる。そうした課題を抱えたなかでの第一次グラント政権、とりわけ共和党内での派閥対立をへてリベラル・リパブリカンズの運動が起こる過程、1872年の大統領選挙が語られる。

第五章では、禁酒運動が実は反奴隷制と並ぶ改革として重要であり、この禁酒運動をめぐる改革の政治と共和党との愛憎関係が明らかにされる。共和党から一定数の支持者を奪うイッシューであった禁酒が、戦後体制においていかに改革の政治が大きな存在感をもつようになる上で重要な役割を果たしたのか、また併せて、労働者と農民による改革運動、グリーンバック運動などが取り上げられる。

そして終章では、これまでのまとめとして、共和党が再建期を通じて南部再建と平時の政治という二つの危機を克服していくなかで、第三次政党制が安定し、世紀末まで続く戦後体制が生み出されていった過程を分析する。結党からわずか十余年にしてその目的を十二分に達した共和党という新興政党が、その後も多数党としての地位を維持した背景には、各州の党組織の自律性に基づく19世紀型政党政治の構造があった点が強調される。

本書の以上の内容は、共和・民主両党による二大政党制が確立される同時期の政治状況とその政治力学を見事に描き出している。また同時に、戦前の奴隷解放運動の延長線上に再建期のラディカルな政治を位置づけてきた従来の大きな政治史に一石を投じるものともなっている。例えば、近年のホワイトネス研究を例にとっても、1870年の共和党急進派サムナー議員による帰化法のなかの「白人」の文言削除の提案は、帰化における人種的障壁を撤廃しようとした動きとして再建法と同種の動きとして単線的に描かれる傾向にある。しかし、この点は評者自身も、同時代の政党政治の複雑な政治家間の確執、とりわけ共和党急進派とそれ以外の各派の対立軸を抜きにしては分析しえないことをこれまでにも論じてきた。本書では、「日和見」という言葉で説明されるが、政治的妥協、交渉術としての産物を人種差別撤廃への単線的な歴史過程に帰着させることはできない。その点、本書の政治家の顔が見えるレベルの連邦レベルの政治力学の分析は出色の出来である。日本で紹介されてきた再建期の歴史で、これほどまでに詳細な第三党運動を含めた連邦の政治の内幕が論じられたことはなく、この点で同時代の政治史のレベルを格段に引き上げたことに

---

[3] 貴堂嘉之「『血染めのシャツ』と人種平等の理念――共和党急進派と戦後ジャーナリズム」樋口映美、中條献編『歴史のなかの「アメリカ」――国民化をめぐる語りと創造』(彩流社、2006年)。

なろう。

評者は、自身の研究にひきつけていえば、同時代の共和党系の『ハーパーズ・ウィークリー』誌を主な史料として、急進派の理念に共鳴するトマス・ナストという画家による連邦政治の諷刺画を分析するなかで、挿絵1、2に描かれた、本書に登場する政治家に慣れ親しんでいる。[3] 挿絵1は、68年選挙のときにチェイスを民主党が担いだときの黒人投票権をめぐる問題であり、挿絵2は、1872年選挙のときのリベラル・リパブリカンの運動を扱っている。本書にも、数枚この種の諷刺画が資料として挿入されているが、この政治家の交友・敵対相関図あっての、それに基づく時代勘があっての政治分析なのである。

だが、こうした政治分析を評価しつつも、評者からして本書に違和感がないわけではない。正直言って、政治学者に対してこのような疑問を呈すること自体、いかがなものかと自身でも思うのだが、本書を通じてわからなくなってしまったのは、そもそも「政治」とは何かという根本的な問いである。議会で争点化したイッシューをめぐり政治家がいかに行動をとったのかという位相の「政治」もあれば、議場の外で展開される、より広範な生身の人間の生を扱うものもまた「政治」ではないか。本書を通じ、奴隷が解放された後の南部社会であれ、北部での自由を求める都市の気運など、その政治の舞台であるはずの社会のダイナミズムが不在であることが、私自身が拭い去れない疑念の根本にあるのかもしれない。もちろん、本書は序と第一章で、問題設定を絞りに絞っており、研究としてはこれを批判することはできないつくりになっている。この点での評価はなんら変わるものではない。しかし、この時代を突き動かしていた歴史的動因とは何であったのか。政党制確立の問題に見事に整理されていく「過去」の出来事は、いつのまにか社会から分離された「過去」の抜け殻にはなっていないだろうか。テッサ・モーリス・スズキは『過去は死なない――メディア・記憶・歴史』（岩波書店、2004年）のなかで、自分たち自身が過去の出来事と連累（インプリケーション）していること、過去が私たちの中に生きていること、そうした過去を理解しようとするプロセスの「真摯さ」こそが歴史叙述に重要なのではないかと説いている。こうした主張に筆者は、どのような見解をお持ちなのか。本書でも取り上げられている「血染めのシャツ」を振る類の愛国主義であれ、この時代を覆った熱気や情念を抜きにして、「過去」を扱うことは許されるのか。社会が宿した南北戦争の教訓、積み重ねられた記憶の集積の上に、再建期の政治はあるのであるから。

以上、場違いな批判であることを承知で自論を述べたが、評者の意図するところは、いささかも本書の意義を低めるものではない。本書が優れた19世紀後半のアメリカ再建期の政治史研究であり、政党史の成果であることは言うに及ばず、著者の切り拓いた研究の領域や手法が今後の研究に与える影響も大きいであろう。本書を契機にさらに多くの議論が今後生み出されることを切に期待したい。